

黒羊男の日記

薬剤疫学分野 安納 崇之

「子曰く、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず。」（論語為政第二）

私は未成年生まれの 40 代。京都大学まで片道 5 km の賀茂川沿いの徒歩通学で日焼けした黒い羊。46 本の櫓の坂に現れる「黒い羊」とは異なり、かつて劇団迷走神経（大学生時代のサークル）にも所属したことのある迷走する黒羊男。「羊をめぐる冒険」ならぬ、四十にして惑いて京都大学 SPH、MCR へと飛び込んだ黒羊男の話を少々させていただきます。

京都大学 SPH への入学前には、私は栃木県の市中病院で脳神経外科医として勤務していました。専門医を取得し数年経つ頃までは手術手技の習得と向上をやりがいにし、手術後には段階毎の達成感を味わいつつ働いていました。しかし、サブスペシャリティーを持たずして地域の急性期病院で目の前の主に高齢者患者の診療を淡々とこなすばかりの日々を送るうち、段々と意識の向く先は個々の手術ではなく、疾患と要因の関連性であったり、患者背景に潜む問題であったり、病院経営などの医療を取り巻く課題へと次第に移っていることに気づくようになりました。そして、独自にアウトカムと要因の関連を調査し学会発表などを経験する中で、データを整理し集団の特徴などが浮き彫りになる面白さに惹かれるようになりました。しかし、それまでの調査研究は、今からすれば因果と相関の違いやバイアスなどへの意識が乏しく、質の低いお恥ずかしい限りの研究の部類でした。臨床研究の系統だった専門的勉強をしたことはなく、指導を受けられる環境にもおらず、悶々とした日々を過ごしていました。そんな現状を打破したく、きちんとした臨床研究法を身につけたいとの願いを叶えてくれる場を探したところ、MCR コースを内包する京都大学 SPH をみつけ、京都へ家族を引き連れ飛び込んだ次第です。

MCR コースを含めた SPH の講座が始まると、臨床現場とはまた質の異なる忙しさに追われる日々となりました。羊だけに追われる役は似合っているのかもしれないとつまらぬ事を考えながら、次々沸き起こる各講座のレポート課題やグループ発表の準備、自身の研究計画など、レベルの高い同期の良い刺激とプレッシャーを感じながらメーメー言いながら取り組むこととなりました。

MCR コースの醍醐味はやはり臨床研究計画法（通称：プロマネ）だと私は思います。プロマネは、各自の課題研究計画をモチベーション高く優秀で既に輝きを放つ同期達と京大 SPH を牽引し各教室の名高い教授陣や教員の前で発表し、質疑応答のディスカッションを通して研究をブラッシュアップするのに有益なご意見や多様な視点を得られる貴

重な場でした。入学早々に自身の発表の番が回って来ることを知った時には、泳げない羊をいきなり海に突き落とされた気分でしたが、事前検討の段階から学生の研究指導につくメンターの丁寧なご指導を得て発表を迎える事ができました。質疑応答ではしどろもどろになりながらの発表でしたが、プレゼン技術や研究内容の至らぬところに多数の気づきを得ることができました。自身の発表機会に加え、同期の発表の見取り稽古、質疑への参加（主に学生中心とする通称プレプロマネの講座もあり）を通して得たことをいくつか紹介します。1. クリニカルクエッション (CQ) からリサーチクエッション (RQ) に落とし込むに至る研究計画が研究全行程の中でも一番大切であることを体得できる。2. 研究背景・目的から研究結果の社会還元までを見据えた一貫した研究意義とストーリー展開（プレゼン技術）の重要性をおさえられる。3. ナレッジギャップをおさえる力をつけられる。4. RQに適した研究デザインの選択を考える力が備えられる。

総論的な1については、手術と共通することだと暫くして気づきました。手術でも救命目的なのか機能回復目的なのか等の獲得目標をきっちりと定め、それに向けたアプローチ法を検討し、起こり得る術中の不測の事態をすべて想定内の事態にとどめる為に過去の似たような手術事例や術前検査結果を手掛かりに術前検討・準備への労力を惜しみません。施設によっては、開頭から閉頭までを起こり得るよからぬ事を含め、要所毎に展開されるべき術野スケッチと共に綿密に検討された手術記録を術前に書けないことには術者を回してもらえないところもあるくらい、術前検討は非常に重要です。そして、いざ手術の時には術前検討に沿ってポイントを押さえつつ、淡々と手術を展開することによって、安全に目標達成を迎えることが理想とされています。

繰り返しになりますが、質の高い研究への鍵となる練り込まれた研究計画書を作成する能力を養えるのが MCR コースです。そこでの学びは私にとって大きな財産です。但し、その価値を高めるためには手術が1度きりで上達するものではないのと同様に、MCR コースの1年だけではなく、絶え間ない勉強と研究を継続する努力が必要であることは言うまでもありません。また、研究は1人で出来るものでもありません。志を同じにする仲間と協力しあい、高めあい、研究活動の活路を開く環境が備わっているのも、この MCR コースであることも申し添えておきます。

MCR の1年を振り返りながら上記を改めて感じている今、入学当初と比べ自分もすこし輝きを得られるようになったかなと鏡を見ながら白髪を増加を発見する黒羊男でした。西田幾多郎が思想に耽りながら歩いた道が「哲学の道」と名付けられたように、通い歩いた賀茂川沿いの道が後世には「社会健康医学の道」とでも呼ばれることを妄想しつつ、黒羊男は歩みを続けたいと思います。人生100年時代、冒頭の論語もプラス30すれば現代に丁度よいのではないのでしょうか。「黒羊男、四十有五にして学に志す。」